

中国空軍が朝鮮半島有事対処能力を強化

漢和防務評論 20131127 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国空軍が朝鮮半島有事対処能力強化のため、瀋陽軍区空軍の配備及び戦闘機の機種を変更しつつあるとの漢和防務評論の記事を紹介します。

中朝国境に隣接する丹東市の民衆は中国空軍早期警戒機 KJ-200 が頻繁に中朝国境付近を偵察飛行していると述べています。これは、朝鮮半島情勢の緊迫に応じて、中国空軍が米軍の動きを把握しようとする行動と見られます。

中国の防空識別圏設定に対して西側各国が非難していますが、中国国内の反応は、ネット上の投書を見る限り空軍の政策を支持するとの意見も多少はありますが、政府の腐敗や政策に対する批判が大多数を占めています。

政府に対して” それどころじゃないだろう” という意見が多いようです。うがった見方をすれば、習近平は国内不満の高まりを回避するため対外トラブルを利用したとも見られると思います。

KDR ニュース要約：

中国空軍は、朝鮮半島有事に対する空軍配備を明らかに強化している。特に早期警戒能力を重点に強化しており、その目的は、朝鮮半島における米軍活動に対する偵察能力の強化である可能性が極めて高い。

重点的に強化されたのは、大連に駐屯する航空兵第 30 師団であり、大連に 24 機の J-11A/B 型機が配備された可能性が高い。大連は朝鮮半島に最も近い J-11 戦闘機の配備基地である。同基地には、24 個の長屋式格納庫及び 24 個の航空機用掩体が建設されている。この種の建設方式は、中国空軍の第 3 世代戦闘機基地でも少ない。大連基地は韓国ソウルから 484 km であり、釜山から 786 km である。したがって大連に駐屯する J-11 戦闘機の行動半径は朝鮮半島全域を覆う。

驚くべきことに、大連基地に 2 機の KJ-200 型早期警戒機を発見した。しかし常駐ではなく、短期間の展開のようだ。これは今年 5 月のことであり、当時中国で流れた噂が正しかったことを意味する。今年、朝鮮半島情勢が緊張度を高めて以来、北朝鮮との国境に所在する丹東市の民衆は中朝国境の中国側を KJ-200 型早期警戒機がパトロールしていると何度も証言している。

同基地は、2つの飛行連隊が編成され、さらに21+16機のJ-8Ⅱ或いはJ-8F型戦闘機が野外係留されているのが発見された。瀋陽軍区空軍の配備変更を見ると、朝鮮半島に対する攻勢防空体制が強化されたことが分かる。航空兵第1師団3個連隊はそれぞれJ-11B、J-10A及びJ-8Fを装備している。航空兵第11師団の四平基地はJH-7Aに換装された。北朝鮮に近い航空兵第21師団だけは依然としてJ-7及びJ-8を主に装備している。

以上